

角倉家こぼれ話

角倉マリ子 著

目次

- 1 「蘭」
- 2 「椿」
- 3 「仙翁花」
- 4 「角倉猫」
- 5 「難破船」
- 6 「歌舞伎」
- 7 「カルタ」
- 8 「ぎやまん」
- 9 「儒教」
- 10 「医聖」
- 11 「はり」
- 12 「連歌」
- 13 「伊藤仁斎」
- 14 「国宝：馬蝗絆」
- 15 「国宝：風神雷神」
- 16 「重要文化財：角倉船」
- 17 「角倉流」
- 18 「素庵のことば」
- 19 「角倉橋」
- 20 「角倉通」
- 21 「角倉町」
- 22 「お土居」
- 23 「隧道」
- 24 「渡月橋」
- 25 「富士川」
- 26 「木津川」
- 27 「舟夫」
- 28 「天狗」
- 29 「木曾檜」
- 30 「嵯峨本」
- 31 「馬印」
- 32 「和算」
- 33 「そろばん塾」
- 34 「花兎」

- 3 5 「加賀様」
- 3 6 「茶の湯」
- 3 7 「おもてなし」
- 3 8 「酢」
- 3 9 「京都洋学所」
- 4 0 「織殿」
- 4 1 「北海道開拓」
- 4 2 「チーズ」
- 4 3 「牛乳」
- 4 4 「種痘」
- 4 5 「二条屋敷」
- 4 6 「嵯峨屋敷」の話
- 4 7 「花のいえ」
- 4 8 「ホテル・リッツカールトン京都」
- 4 9 「星のや京都」
- 5 0 「日本銀行京都支店」
- 5 1 「二条城」
- 5 2 「大井神社」
- 5 3 「角倉稻荷神社」
- 5 4 「新井白石」
- 5 5 「伯蒲慧稜」
- 5 6 「刀工」
- 5 7 「嵯峨人形」
- 5 8 「益壽糖」
- 5 9 「菓子」
- 6 0 「小説」
- 6 1 「御庭焼」
- 6 2 「絵師」
- 6 3 「清水寺」
- 6 4 「祖父」
- 6 5 「家紋」
- 6 6 「嫁入り」
- 6 7 「蛇体」
- 6 8 「比良の父」
- 6 9 「クリスマス」
- 7 0 「羅窓禅師」

- 7 1 「家の教え」
- 7 2 「三方五湖」
- 7 3 「のりこさん」
- 7 4 「龍神様」

付録

散文詩「安南幻想」

1 「蘭」

美しい蘭、その魔性の美しさは妖艶とまで形容される花です。いまでは、様々な種類がありますが、そもそもわが国にはいつ頃入ってきたのでしょうか。

「角倉文書」のなかに「了以が御朱印船の許しを賜りカンボジアへゆく。その香をすうと延命長寿なりという奇花の種子をえて、これを駿府（家康）に献上す。神君は珍重されてこれを蒔く。芳香なり。もってその効も有らんかと仰せられて、その花に”らんか”と命名さる」とあり、すると、日本に初めて蘭をもたらしたのは了以翁かもしれません！？

2 「椿」

神代植物公園にむくげの花で「角倉」という名のものがあります。

「角倉花笠」という名の花は市販されているようです。椿にも「赤角倉」「白角倉」とあり、下の写真はは二条城で見つけたものです。



3 「仙翁花」

五山文学に掲載されていた文。「山城嵯峨の白雲山下に、往昔、一異人有り、医を以て業と為す。其の郷閭を詳かにせず、又た其の姓名を言わず。積年累月、容色衰えず。時人之を呼んで仙翁と称す。後、三輪氏の女を娶り、一男子を産み、名づけて称意子と為す。……言い訖って草を地上に投ず。化して一草花を生ず。世に之を仙翁花と謂う。七月七日平旦脱去せり。時人其の徳を慕い、寺を建てて之を祀る。称意子、天を仰いで慟哭す。……

文中に出る日華子というのは、角倉意庵（吉田宗桂、1512～1572）の号である。足利義晴の侍医で、天龍寺の策彦周良が入明したときに随侍したことがある。元龜三年十月二十日死没、年六十一。大堰川などの治水で有名な角倉家の祖、角倉了以（1554～1614）の父親である。この書を記した「西斎老人子謙子」という人物は誰であろうか。「子謙子」という名は不自然のようにも思うが、原本を見ていないので、いまは『嵯峨誌』の翻刻を踏襲する。「日華子、予と方外の交わりを締んで、茲に年有り」とあるように、角倉意庵と親しい人物が書いたものである。ともに入明した天龍寺の策彦周良（謙斎）であるならば恰好に思うが、誰なのかいまは未詳である。疑問を残しておく。

初出『季刊 禅文化 185号』（禅文化研究所、2002年）

これは山野草「仙翁花」について名の由来を論じた文です。オグラセンオウゲの写真を添えます。



4 「角倉猫」

少し背が高くお上品な猫ですが、この猫は御守りの役目があります。どんなに困難な航海であっても、雄々しく大洋に乗り出し異国へ行った古の人々。言葉もわからず、気候も違うのに、夢と希望を摘んでいった貿易船。風を読むのに、猫の顔をこする様子をみて判断したり、ささっと隠れて出てこないのに嵐の来るのを感じたり、穀物の袋を食べる鼠を退治したり、そして可愛がってやったり旅の友であり、同僚であり、守り神であった黒猫。

そのゆえ、いまでは角倉猫として人生の航海のお守りとなりました。一族の御守りはあります。

Suminokura Cat

Suminokura family cherishes black cats from generation to generation



5 「難破船」

角倉了以が御朱印船を17回出したうち、1回だけ難破したことがあったといます。綱に鉛の錘をつけ40尋（いまの水深60メートル）より深い海域には入らぬよう航海したので、幸いにも土地の人々に助けられ500人乗りの船ではあったが、行方不明者は13名だったと記録に残っています。

そして安南の人々に介抱され元気を取り戻した乗組員は船を仕立てて日本へ帰国させてもらったのです。そんなことに思いを馳せていると、ベトナムにご恩が尽きません。

また難破船はどうなったのだろうと興味があります。船の積荷はどうなったのだろうと。そんなとき海中考古学の先生に教えていただいたことには、ベトナム沖には水中に沈んでいる船がいくつもあるということです。

6 「歌舞伎」

角倉船で渡海した播磨の男は15歳の時より天竺（インド）に数回渡りその風俗・習慣を『天竺渡海物語』に著しました。またシャム（ビルマ）の日本町でも貿易していました。彼が記した異国話は鶴屋南北の『天竺徳兵衛韓噺』という歌舞伎になって人気を博した。ガマ蛙がドローンと変身する歌舞伎です。これも面白いこぼれ話です。

7 「カルタ」

百人一首は、読み札には美しい絵が描かれていて、取り札に下の句があります。その絵で当時の天皇、内親王、貴族、高僧などの容姿がわかって面白いのです。では、最初から絵があったのでしょうか？ カルタになったのはいつでしょうか？藤原定家は小倉山荘の障子に歌仙の似せ絵を藤原信実を描かせて歌一首を付けて飾ったとも言われています。江戸初期の元和年間に角倉素庵がそれらを参考に歌仙絵を描き、それが光琳カルタの絵柄となっているそうです。

（参考）嵯峨本（さがぼん） 本阿弥光悦（ほんあみこうえつ、1558～1637）が角倉素庵（すみのくらそあん、1571～1632）の協力を得て平仮名交りの国書を木活字で出版しました。角倉本・光悦本とも呼ばれたこの書籍は、装丁の美しさが特徴で、表紙・本紙には雲母紙を使っています。慶長13（1608）年刊の『伊勢物語』（10種）をはじめとし、『方丈記』『百人一首』『徒然草』『源氏物語』などを出版しました。

8 「ぎやまん」

母の小さい頃には、珍しいものが一杯あったそうです。ぎやまんも、お祭りに出してきて使っていたそうです。母は子供心に、もっと透き通ったきれいなガラスがあるのに、なぜこんな古いのをつかうのだろうと不思議に思っていたそうです。ぎやまん、というのは頭の中から離れない言葉となりました。

9 「儒教」

吉田宗恂の娘妙源は里村紹巴の息子の玄仲と結婚しました。その娘なべは伊藤了室と結婚しました。そして生まれたのが伊藤仁斎です。儒学の大家で京都学派の祖です。二尊院には皇族の墓地が主ですが、民間より角倉家と伊藤家が墓地を有していますが、そんなつながりがあったのです。

10 「医聖」

角倉了以は有名ですが、その父である吉田宗桂こそその時代の医聖として名を馳せました。遣明船で二度渡航し、明の皇帝に薬を献上したこともあるそうです。医学書をはじめたくさんの本を持ち帰り、蔵書は「吉田称意館」に所蔵されました。

長男である了以は周知のと通りの河川開削、朱印船貿易など目覚しい活躍をしましたが、次男の宗恂は父の医業を継ぎ徳川家康につかえました。またカルロ・スピノラという宣教師が京都へやってきたこともあり、日時計や渾天儀をつくり天文学、数学を学びました。「漏刻算」という時間の計算にかんする著述も残しました。吉田宗恂の息子如見は『三尺求函数求路程求山高遠法』という測量の本を為しました。

11 「はり」

研医会通信 75 には「臨済宗禅僧、策彦周良に同行し明に渡った吉田宗桂（意庵・日華子）は、世宗嘉靖帝に謁し、その病を治した功績で元版の『聖濟総録』200 巻を賜った。『聖濟総録』眼目門には「鉤割鍼鎌法」という鍼による目の治療についての記載があり、外科的治療が行われていたことが伺える。」とあります。眼科治療の歴史にも触れられています。

1 2 「連歌」

あの縄をぐるぐる巻いたそのうえにツルハシをもって片膝をたてて座っている了以翁の風貌を知る方はまさかと思われるでしょうが、了以も歌を詠んでいたといいます。どんな歌だったのか、連歌の記録を見て知りたいと思います。

連歌の創始者である里村紹巴の次男である玄仲は天正4年（1576）生まれ、御朱印貿易の豪商、兼河川土木事業家である角倉了以の姪を妻とし、長女「なべ」ほかを産みました。この「なべ」が、伊藤仁斎を産みました。そんな関係もあって、角倉了以もまた最上義光の主宰する連歌会に五回を同席したといえます。

1 3 「伊藤仁斎」

伊藤仁斎の母那倍（なべ）は、連歌師里村紹巴の孫です。その母つまり仁斎の外祖母は角倉了以の姪。了室以下、伊藤家の墓は角倉家と同じ嵯峨二尊院にあります。

寛永4年（1627年）7月20日、京都近衛堀河（東堀川通下立売上ル）に了室の長男として生まれました。古義堂という塾を開き多くの門人を教えました。

1 4 「国宝：馬蝗絆」

「馬蝗絆（ばこうはん）」この重要文化財である茶碗の由来は面白いのです。東京国立博物館の説明によるとこんな記述があります。「日本に伝えられた青磁茶碗のなかでも、姿、釉色が特に美しいばかりではなく、その伝来にまつわる逸話によって広く知られている作品である。江戸時代の儒学者、伊藤東涯によって享保12年（1727）に著された『馬蝗絆茶甌記』（ばこうはんさおうき）によると、この茶碗は安元初年（1175頃）に平重盛が浙江省杭州の育王山の黄金を喜捨した返礼として仏照禅師から贈られたものであり、その後室町時代に将軍足利義政（在位1449～73）が所持するところとなった。このとき、底にひび割れがあったため、これを中国に送ってこれに代わる茶碗を求めたところ、当時の中国にはこのような優れた青磁茶碗はすでになく、ひび割れを鏝（かすがい）で止めて日本に送り返してきた。あたかも大きな蝗（いなご）のように見える鏝が打たれたことによって、この茶碗の評価は一層高まり、馬蝗絆と名づけられた。

平重盛所持の伝承は、龍泉窯青磁の作風の変遷に照らして史実とは認めがたいものの、足利将軍家以降長く角倉家に伝えられていたことから、伝承には信憑性がある。内側に緞子（どんす）を張った中国製の漆塗りの曲げ物に入れられており、何らかの特別な事由で中国から運ばれた茶碗であることは確実である。」

この頃の説では、いなごではなく、蛭だという見方もでているようです。ひとつの茶碗のミステリーとして小説のようです。この青磁茶碗は長く角倉家のものであったとのこと。どうしてホッチキスみたいにできたのか不思議。ほそい錐であなをあけたのでしょうかね。

東京国立博物館に所蔵してあります♪

http://www.emuseum.jp/detail/100886?word=%E9%A6%AC%E8%9D%97&d_lang=ja&s_lang=ja&class_id=&title=&c_e=@ion=&era=&cptype=&owner=&pos=1&num=1&mode=simple

1 5 「国宝：風神雷神」

最近、林 進先生がびっくりするような解釈をなされました。俵屋宗達と角倉素庵の友情が風神雷神に秘められているということです。素庵がなくなって一年、他の依頼を断ってこの屏風絵を書きあげて、御霊に捧げたということです。

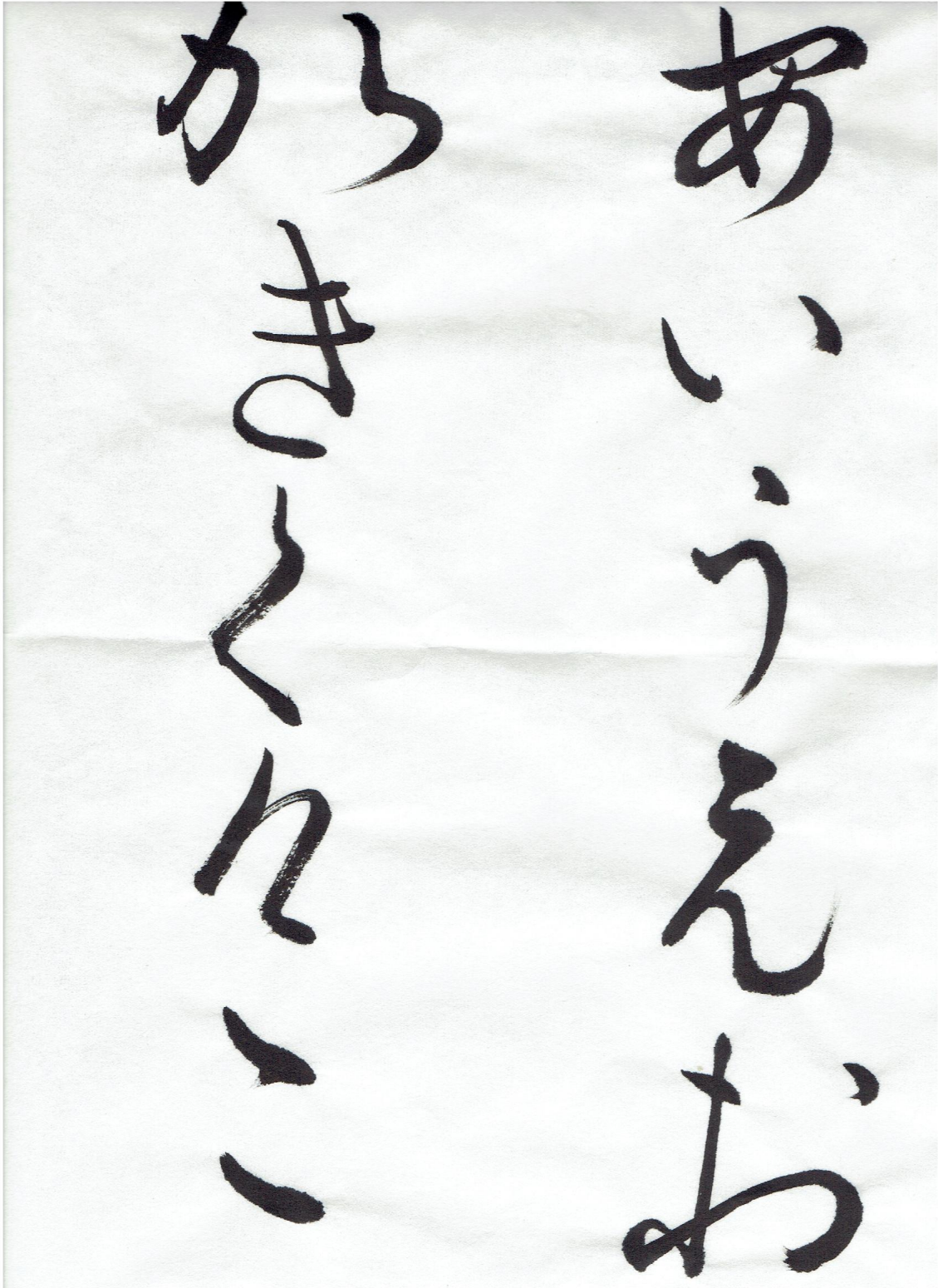
先生はこう書いておられます。「黒雲に乗って虚空に上って行った。謡曲『雷電』の最後の詞章「嬉しや生きての恨み、死しての悦ひ `これまで `なりやこれまで `と。黒雲にうち乗って虚空に上らせ給ひけり」と謡う。白色の「雷神」(道 真の怨霊)に、白癩(ヒ `ャクライ。皮膚か `白くなる癩を当時「白癩」と呼んだ `。『日葡辞書』)を患い 失明して亡くなった「素庵」を重ねた。素庵の鎮魂のために、宗達は、「風神雷神図屏風」を描き、自らも「風神」となり、「雷神」に寄り添った。」

1 6 「重要文化財：角倉船」

1 7 「角倉流」

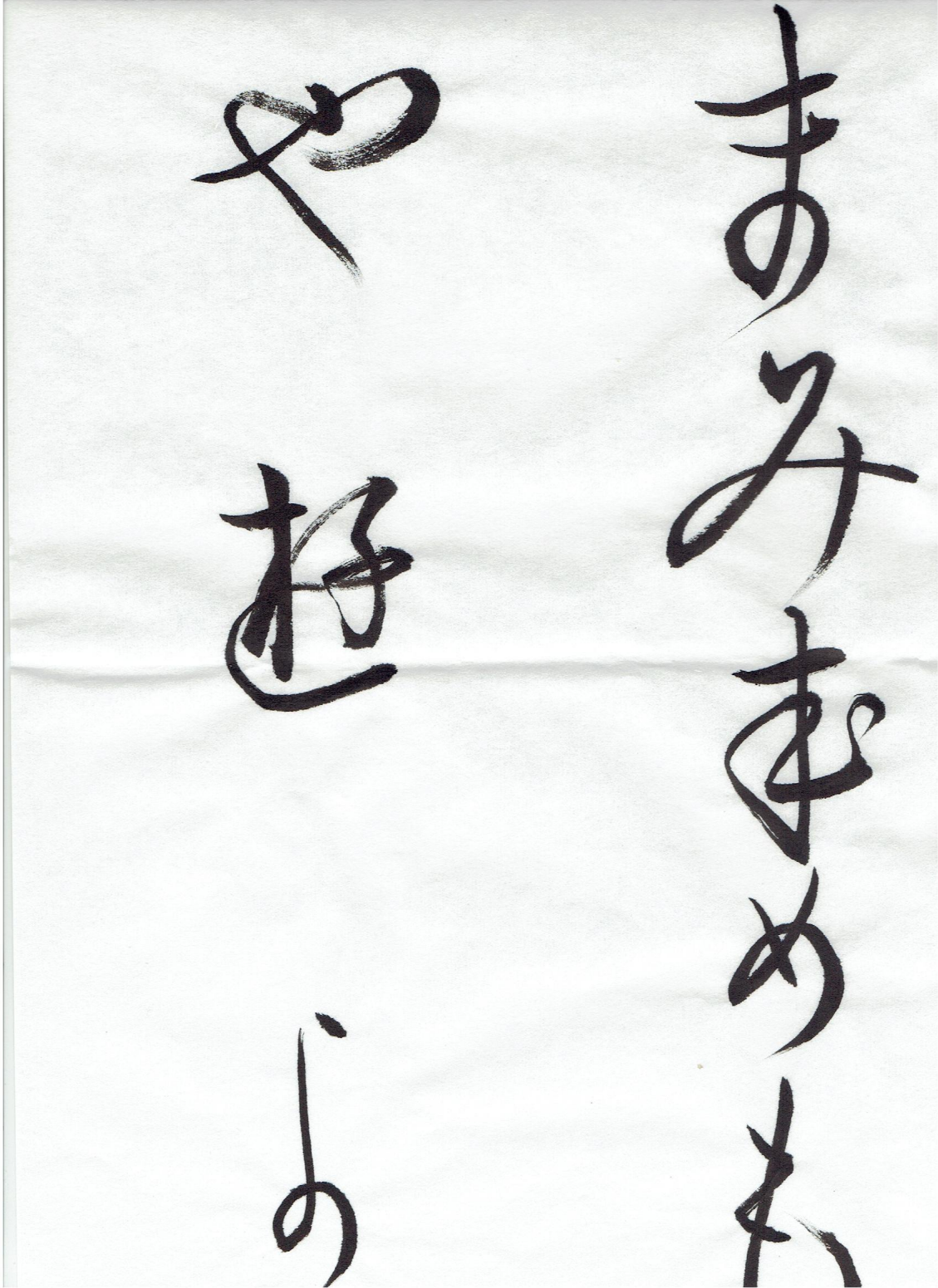
素庵さんは、(うちの家では、了以さん、素庵さんと呼ばせていただいております) 能書家で知られていて、最近の論文では、その書体がすべて揃えて明示されておりました。

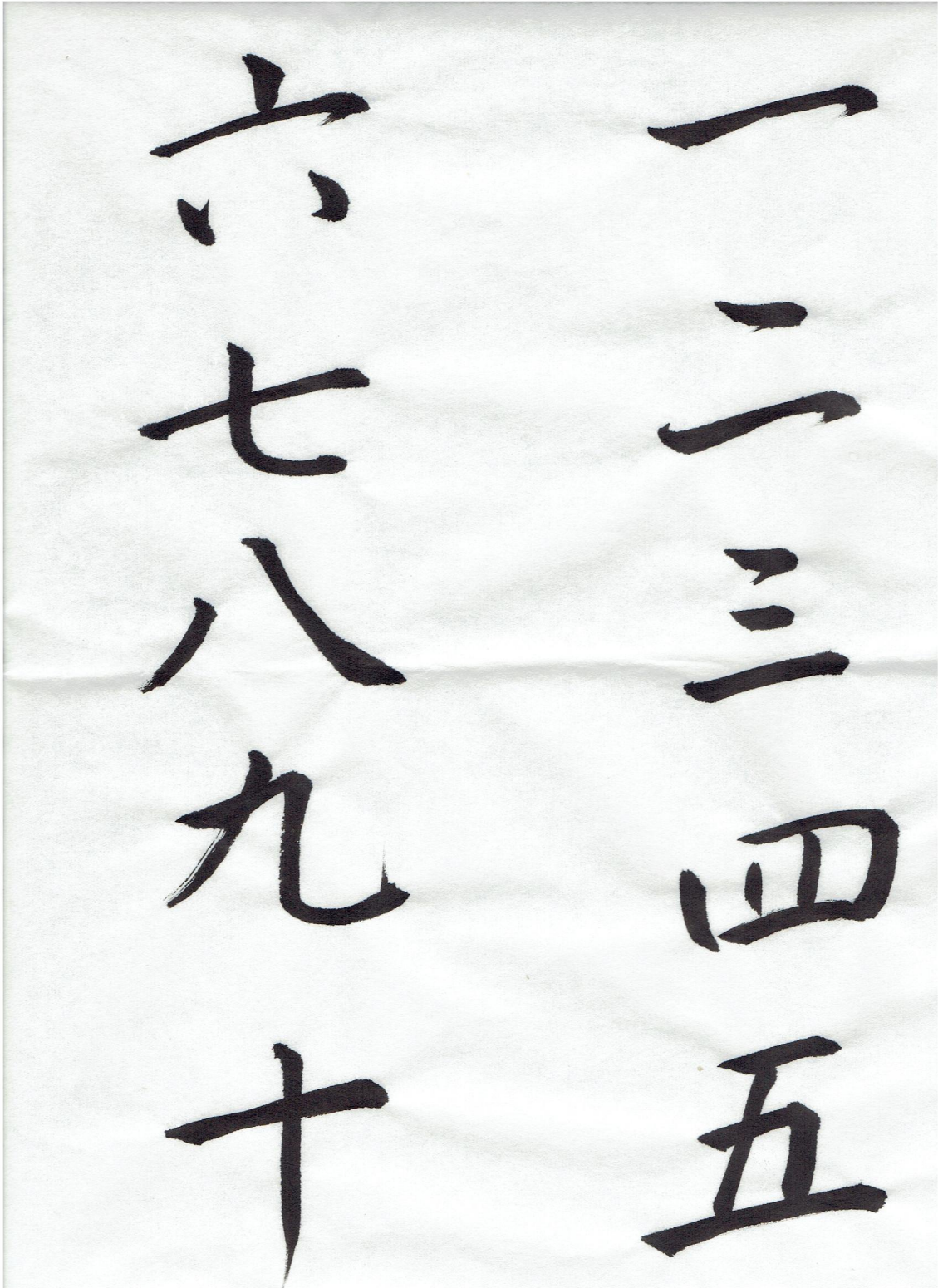
村田辰夫先生のお計らいで、私たちの手習い用にお手本を書いていただきました。いろはと数字です。



さしすせそ
たちつとと

なぬわの
えひふへほ





あ	い	う	え	お
か	き	く	け	こ
さ	し	す	せ	そ
た	ち	つ	て	と
な	に	ぬ	ね	の
は	ひ	ふ	へ	ほ
ま	み	む	め	も
や	ゆ	よ	ゆ	よ

ん ち へ へ へ
ち へ へ へ へ
へ へ へ へ へ

へ

一 二 三 四 五 六 七
八 九 十

い ら は に ほ
ち り ぬ る を わ
よ た れ う つ ね
ら む う わ の た
や ま け ぬ に
あ き ち め み
急 ひ も せ 寸

18 素庵のことば

「信義はイルカにも通じ、たくらみはカモメも察する。天は嘘偽りを許さない。」

「異国と我が国は風俗や言葉の違いはあるけれども、天より授かった本性には変わりはない。それを忘れて異なるところを不思議がったり、欺いたり嘲ったりはいささかもしてはならない。たとえ向こうがこの道理を知らなくとも、我々は知らずにいてはならない。」

「貿易とは人と己に利益をもたらすものである。人に損失を与えて、己に利益をもたらすものではない。ともに利益を受けるならば、たとえその利は小さくとも、得るものはかえって大きい。利益をともにしなければ、たとえ利が大きくとも、得るものはかえって小さい。ここでいう利益とは道義のことである。負欲な商人は五を求め、清廉な商人は三を求めるといふ。このことをよく考えよ。」

「もし他国で優れた人物に出会ったら、父か師のように敬って、その国のしきたりを学び習慣に従うようにせよ。」

角倉素庵、すみのくら・そあん。江戸時代初期の土木事業家、書家、貿易商。書道の「角倉流」を創設した。「洛下の三筆」の一人に数えられた。

19 「角倉橋」

高瀬川の下流、伏見に「角倉橋」というのがあります。



20 「角倉通」

いまはメインストリートの河原町通りも、二条屋敷があったものですから、角倉通りといわれていたそうです。ウィキペディアに書いてありました。

「都市化の契機は、角倉了以・素庵親子による高瀬川の開削であり、現在の日本銀行京都支店の場所に角倉屋敷があったことから、二条通から南は、かつて「角倉通」と呼ばれていた。」

21 「角倉町」

渡月橋を少し下ったところ、「花のいえ」のところが角倉町で、バス停にもなっています。もうひとつ竹屋町二条上がったところにも角倉町があります。

日本土木工業協会のHPには次のように書かれています。「中世にも橋は断続的であっても存続していたようで、大堰川に育まれた嵐山は平安貴族の避暑地としても親しまれ、紅葉の名所としての名声も鎌倉時代には定着していたよ

うである。そして「渡月橋」という名前は亀山天皇が「くまなき月が渡る」のに似るという意味から名付けたという。

渡月橋が現在の位置に架けられたのは慶長十一年（一六〇六）のこととされている。江戸時代の実業家角倉了以（すみのくらしらりょうい）が大堰川の上流保津川の開削工事を行ったときのことである。木橋時代の渡月橋は構造的には粗末なもので、明治になっても人一人がやっと通れる程度の板橋であったため、洪水による被害を度々受けた。しかし、そのもろく、か細い木橋の姿が嵐山の風景に定着することになった。」

2.2 「お土居」

都市城壁が京都市内にあったということが信じがたいことですが、実際にありました。（西川幸治「町の変貌」『京都の歴史』5巻、京都市、1972年）。京都町奉行は、少なくとも江戸後期には御土居堀の巡見を繰り返しましたし、幕府は寛文9年（1669）、高瀬川で有名な角倉（すみのくら）家に「土居藪之支配」を命じています。これは都市を守るセキュリティの意味と、洛中・洛外の区分け、災害（大火、洪水）の防止に役立つことでもありました。まだ所々にお土居を偲ばせる土塁をみることができます。

2.3 「隧道」

以前「角倉隧道」のCG動画を見たことがあります。水路ですので、大きなトンネルではありませんが、川の上流をせきとめ人工池をつくり、コンスタントに旧嵯峨村に灌漑のための水を供給したとのことです。菖蒲谷池と呼ばれていますが、了以の甥である吉田光長・光由の二人が寛永年間に了以と大覚寺法親王の遺志を継いで造ったそうです。

参考文献

角倉家により展開された江戸期の河川管理技術に関する土木史的研究 山田尚人 岐阜大学工学部講師

2.4 「渡月橋」

2.5 「富士川」

角倉了以は朱印船貿易と河川開削で有名ですが、河川開削といってもいろいろあります。一番に挙げられるのは大井川、富士川、天竜川の開削。そして保津川です。鴨川の水を引いた高瀬川もそのひとつです。

その当時、鴨川を水運ができるように改造したものの増水・氾濫により無理とわかりコンスタントな水量と、通舟に適した川を必要とし高瀬川を作りまし

た。大きな岩があれば、舟が傷むし、危険です。また浅すぎても舟底がこすつてしまい動きません。舟付き場も、貯木場も必要です。舟作りも必要です。

河川開削には非常な労力が必要ではありますが、それ以上の経済効果があり当時の民のみならず、未来の民が恩恵を受けるという「了以が意気に感じる」事業であったろうと思います。

富士川開削を顕彰する石碑をご紹介します。

静岡県にある「富士水碑」です。↓

<http://www.town.fujikawa.yamanashi.jp/kanko/meisho/fujisuihi.html>

26 「木津川」

洪水でその跡形もありませんが、国交省木津川河川管理所のホームページには角倉了以が木津川を改修工事したとあります。

慶長年間（1596～1615）に筒井定次は土木家として有名な京都の豪商、角倉了以に要請して銚子が口を取り除き、京・大坂への航路を開かせました。徳川の時代になると藤堂高虎がこの地を治め、今度は大阪からの守りを固める城として上野城の改築を実施しました。城の城郭は長さ 30m と言われ、大阪城と肩をならべる規模です。

角倉は上野城下の長田橋まで川底をさらえ、水運は多いに盛んとなりました。しかし、安政元年（1854）の大地震で上野盆地は最大約 1.5m も地盤沈下をおこし、岩倉峡の水はけが再び悪化します。そのため明治 3 年の「午年の水害」と昭和 28 年の「東近畿大水害」と大きな被害がでました。特に「午年の水害」では角倉の作った施設も破壊され、安政の大地震以後、膨大な費用と労力を投じて水防体制を整えたにもかかわらず、壊滅的な被害を受けた岩倉峡に近い上野盆地北西部は復旧をあきらめ、大規模な「避水移居（ひすいいきよ）」となり、657 戸が集団移転したと記録されています。

一方で上野市の年平均降水量は三重県下でも最も少ない地域であり、農業用水の下流の村や重粘土の丘陵の村では深刻な水不足に悩まされてきました。これは三重県災害史に記される干害の大半が伊賀上野地域の記事であることからわかります。藤堂藩ではさかんに新池の構築、古池の修繕を奨め、地理的条件からため池構築が無理な小田村に対しては、上野城の壕の水を落として、干ばつを防いだそうです。

現在でも上野市や阿山町、伊賀町などの流域には 500 を超えるため池があり、小雨のときには活躍しています。

下流部の山城盆地に入ると、急に明るい野が開けます。この地は天平の頃、ひととき都となった場所です。都は恭仁京（くにのみやこ）といい、聖武天皇が繰り返した遷都のひとつで、ごく短いものでした。

恭仁京遷都に伴い、木津川を越えて新京を造るためにいくつかの橋が渡されました。その中で行基が優婆塞（ウバツカ）らの弟子を率いて現在の木津町と山城町とを結ぶ泉大橋の近くに造営したのが泉橋です。泉橋によって結ばれた南北に延びる道は恭仁京右京の中心道であり、山背国府の中央道でした。なお、現在の泉大橋は国道 24 号の開通に伴い戦後にかけてかけられたものです。

27 「舟夫」

嵯峨小倉山常寂光寺には角倉栄可塔とよばれる一族の墓地があります。本堂の左の道を右手に登っていくと多宝塔があり、その奥です。竹林と萩に彩られ京都市内を一望する浄土のような場所です。その開祖である日禪上人は岡山県牛窓に舟夫が多いことを知り大堰川の開発に呼び寄せたそうです。その方々はこの地に移住されたと聞いています。角倉町という名称となっています。

28 「天狗」

天狗の爪??? 鞍馬山には天狗がいて、義経が幼少時代（牛若丸）に武者修行したときに教えたとの言い伝えがあり、そのためいまでも京都バスのマークは天狗のウチワです。御嶽神社に奉納された角倉与一の絵馬を調べていたら、同じページに天狗の爪を発見。本物だったら、天狗も本物？ ちょっと近しく感じてしまいました。天狗とは、日本固有の山の神の一。また、鳶や鳥と関係の深い妖怪の一。修験道の影響を受け山伏姿で鼻が高く赤ら顔、手足の爪が長くて翼があり、金剛杖・太刀・羽団扇をもつ。神通力があり、飛翔自在ともいう。（スーパー大辞典より）

29 「木曾檜」

角倉は木曾川の開発もかかわり、優れた河川土木の工事を行いました。それにより木曾山、裏木曾の貢納木の採取権を得ました。木曾檜は建築材料としてもっとも優れた品。それを運ぶためには川の流れを利用して、いかだを組んで下流へ運びました。川を開き、その利権もいただいたということです。

30 「嵯峨本」

3 1 「馬印」

馬印とは馬に立てて出陣のときに家の目印となる機織のことで、その一覧を「御馬印」といいます。6巻あって、これにはわが国最初期の色刷が施されている。金・銀・胡粉・朱・藍などの色を用いている。序文から吉田光由の撰であるそうです。嵯峨角倉一族であり、彼の家が早くから貿易に従事しており、その関係で西欧の色刷本やキリシタン版などの影響で色刷本に志したものかといわれています。伝本きわめて少なく、巻一が宮内庁書陵部に、巻三が大東急記念文庫に蔵されているのが知られています。

3 2 「和算」

角倉了以の叔父の孫ですから、従兄弟の子供にあたる吉田光由は、そんな時代に生まれました。はじめに毛利重能に算法を学び、四巻の和算書を書きました。天竜寺の僧が「塵劫記」と命名した本です。いまでも使っている「億」「兆」「京」・・・「分」「厘」「糸」・・・の呼び方もここで表わされています。あの小学校で習った「つるかめ算」もこの中にありますね。岩波文庫にもありますので、江戸期のベストセラーを現代人が読むのも面白いかもしれません。幼い光由とイタリア人宣教師カルロ・スピノラ（後に長崎で処刑され、26聖人と列福される）との交流があったかもしれません。それは謎です。

3 3 「そろばん塾」

やわらかい御餅で名高い走り井餅のホームページで発見。日本で初めてのそろばん塾は、河原町二条。いまの日本銀行京都支店です。一族の吉田光由は和算家ですから、当然といえば当然のこと。でも、京都が発祥であったのは知りませんでした。「願いましては・・・パチパチパチ」失くしてはいけない道具と技術だと思います。

3 4 「花兎」

金襴という織物は、京都の西陣で昔から盛んに織られています、わが国には中国から伝わってきたときいています。僧侶の袈裟や能装束に用いられたり表装にも使われてきました。いろいろな裂（きれ）のデザインが継承されていますが、角倉了以が好んだ柄が「花兎」であったことより、角倉金襴と呼ばれるようになったものがあります。

3 5 「加賀様」

NHKの大河ドラマ「利家とまつ」は、いまでも記憶に新しいとこ

ろです。また2015年春から北陸新幹線が開通し、加賀百万石の勢いはいまだに衰えることはありません。金沢へは毎年五年間くらい通いましたが、なんとなく京都に似ていて、雅な感じが好ましいのです。

前田のお殿様は文化教養がお高く京都の文化人を招かれたりして縁が深いのでした。その利家の32歳のときの子息利政は父親とは少し違い群雄割拠の武将というよりは風雅人とみえます。その娘の種は、角倉与一玄紀（素庵の長男）に嫁してきました。お姫様のお嫁入りは、さぞかし見事なことであったでしょう。想像に難くありません。

36 「茶の湯」

37 「おもてなし」

近年の外国人観光客増加を見越して、京都に富裕層をターゲットにリッツ・カールトン京都がオープンしました。もとホテルフジタのあった場所です。鴨川の対岸より夕映えにシルエットで建物の全容がみえます。日が暮れば室内の明かりがともり、それは美しいホテルです。この建築設計は、上賀茂の総合地球環境学研究所もつくった日建設計さんです。コンセプトがはっきりしていて、優雅かつ知的な建物で、そこに集う人々が最高に映える建築内容となっています。その会社のHPには次のように書いてあります。「ザ・リッツ・カールトン京都が立地する鴨川沿いの一帯は、かつて平安貴族たちが東山から昇る月を愛でるために別邸を構えた場所でした。またこの敷地は、桃山時代以来の豪商角倉家が本拠を構え、明治時代になると男爵藤田伝三郎の邸宅となった場所でした。彼らはそれぞれの時代において文化プロデューサー的役割を担っていました。まさにここは京都の中でも特別な文化伝承の地です。このまたとない敷地を得た積水ハウスの和田勇会長は、国賓を迎える京都迎賓館に対して、ここには「民間の迎賓館」をつくりたいという想いを強く持たれました。」

そうです、この一帯は角倉の敷地で、徳川から与えられた土地です。どんどん焼けという大火事では奇跡的に助かったといわれています。ホテルなどなかった時代、海外の要人が来られたら角倉屋敷が宿泊に使われていたとも伝えられています。古くから国際交流を旨とする家らしいお話です。

畑中 香名子氏は次のように記述されている。「玄々斎の功績に続いた家元にも

触れておこう。玄々斎の娘猶鹿子と結婚し、12代を継いだ又妙斎は角倉家から養子に入った。明治初期、京都に西洋式のホテルが無かった為、角倉家も外国人の宿舎となった。玄々斎は、角倉家に滞在していたフランス使節に立礼式でお茶を差し上げている。その席に御孫駒吉(後の円能斎)がちょろちょろと現れ、皆微笑ましく集ったという。その数年後、明治10年(1877)に玄々斎がこの世を去り、駒吉は5歳、又妙斎は26歳であった。又妙斎は34歳で13歳の駒吉に後を譲り外へ向けて茶道指導に当たり、妻猶鹿子が5年間家元代理を務めた後、18歳で妻をめとった円能斎が千宗室を名乗る。円能斎は又妙斎、玄々斎からの教えを形にし、耐え難きを耐えた後には素晴らしい功績を残している。こはいずれ・・・」角倉の血は、明治から外国のゲストにおもてなしをも旨としていたのです

38 「酔」

「日文研 近世畸人伝」より

僧桃水、諱雲関、筑後国の人にして、肥前島原禅林寺に住持す。跡を匿して後、其行方をしるものなし。帰依の尼、国をいで、かたがた尋めぐりて、洛東四条河原に至る時、師菰うちかづきて、同じさまなる乞丐人の病るを介抱してあられしに、涙を流して拝す。さて、和尚のためにとて自紡績し、年を経て織たてたる臥具の背に負しを、とり出してまゐらするに、和尚、今の身にしてはもちうる所なしといひてうけず。尼もさるものにて、自用給ふ所なくば、御心にまかせてともかくもし給へ。師に供養せるうへは、直にすてたまふもうらむ所なしといふ。さらばとてうけて、やがて病る乞丐にうちきせたまふを、他の乞丐人ども見て大に驚き、これは凡人にあらずといひて、俄にあがめたふとみければ、そこをもたちさり給ふ。そのころ弟子の両僧も、尋求ること三年にして、安井門前にて、乞丐の集たる中にて見つけしかば、其あとにつきて人なき所に至り、師もかくのごとくなれば、われわれも同じ姿となりて従ん、とこふに、師不肯。一人は師の指揮をえて他方の知識のもとへゆく。一人はしひて従ふほどに、さらば吾する所をみよ、とて伴ひゆく所に、乞丐の死せるあり。やがて弟子とともは是を埋めつ。さて其死者の喰ひあませる食を、己まづ喫して、汝もよく喰んや、とあるに、止ことを得ずして喰ひたれども、臭穢に堪ず、嘔吐す。師見て、さればこそ此境界には堪ざりげれ、これより別れん、とて去りぬ。後其遊ぶ所をしらず。ある時、肥後熊本の本の寺僧、国侯大旦那たるをもて、勢ひ猛に、儀衛を盛にして関東に行道、大津の駅に休らふ間、馬士沓買んとて、老父、とよぶ。此は是日比、とある家の軒に、仮初にさしかけてある翁がつくる所の沓、草鞋いとよければ、ぢいがくつとて、輿夫、馬卒もてはやしける也。時に其沓もて来る翁を見れば、桃水和尚なり。彼僧おどろき、輿をまろび出、

手を取てなみだを流す。これは師の法弟なり。とかく旧を語りて別んとする時、汝唯諸侯に酔ことなかれと示す。かゝりしかば又去て、京の片ほとりに小家を借り、僧形にかへり、行乞してあられしを、角倉氏其徳を見しることや有けむ、しひて請じて供養せんといへども不応ぜ、曰、吾は人の供養を請ることを欲せずと。こゝにおいて角倉氏、思惟してあざむきていふ、吾邸人多ければ、日々残余の飯空しく腐爛す、実にをしむべし。是を師に参らせんに、酔を醸して売給はゞ、老脚を勞して行乞し給んにまさらんかと。師これを真とし、それこそいとよき事なれ、捨るものは拾ふべし。いで吾は酔売の翁とならんと。これより洛北鷹峰にて、酔屋道全とも、通念とも自称して年を経。遷化は天和三年九月也。其乞丐の時の口号を、弟子琛洲といふ僧の聞たるは、如是生涯如是寛シ。弊衣破椀也夕閑々。飢エテ餐シ渴シテ飲ム只ダ吾レ識ル。世上ノ是非総ベテ不干ヲ。（如是生涯如是寛シ、弊衣破椀マ也夕閑々。飢エテ餐シ渴シテ飲ム只ダ我レ識ル、世上ノ是非総ベテ干ラズ。） 大津にて沓売のとき、或人其年老たるを憐思ひしにや、大津絵のあみだ仏の像をあたへしかば、其こやに掛置、消炭して上に書す。

せまけれど宿を貸ぞやあみだ殿後生たのむとおぼしめすなよ

鷹峰にて遷化時の遺偈、七十余年快哉。屎臭ノ骨頭堪フル作スニ何ゾ用ヲ。咦。真帰ノ処作麼生。鷹峰月。白風清シ。（七十余年快哉、屎臭ノ骨頭何作何ゾ用ヲ作スニ堪フル、咦、真帰ノ処作麼生、鷹峰ノ月、白風清シ。）」

39 「京都洋学所」

日本薬史学雑誌 Vol. 34 No. 1 に鈴木栄樹氏の論文「明治期の京都薬科大学」があり、そのなかに次のことが書いてある。ドイツ教師レーマンは、明治3年京都府に雇われ河原町二条の「角倉洋学所（欧学校ともいわれた）」に入った。京都洋学所はいまのホテルオークラ京都の地に作られ、名を欧学舎と改めドイツ語教育から始めたとあります。これが京都府立医科大学、京都薬科大学の素地となったということです。

レーマン・ハルトマンをウィキペディアで調べると、興味深いことが書かれています。（以下引用）1870年（明治3年）11月8日、ルドルフは京都府が角倉邸に新設した学校である「角倉洋学所」にドイツ語教師ならびに建築技師として招かれた。当時の大参事・榎村正直が、京都府顧問を務めていた蘭学者・山本覚馬などの策を採用し、外国人教師を迎えて語学教育を行うことを決定した

ためである。角倉洋学所は翌年3月に移転し「欧学舎」となり独逸学校を開き、4月27日には英語学校、10月20日には仏語学校を開校した。1873年（明治6年）5月、独逸学校に医学予備科が設置され、医学志望者にドイツ語を教えることとなり、さらに6月、欧学舎は二条城の北に新築され「欧学舎独逸学校」に改称。ルドルフは1872年・1873年に和訳独逸語辞書をそれぞれ2冊ずつ出版し、1877年（明治10年）には「和独対訳字林」を校訂、日本で初めての和独辞典とされている。独逸学校は1879年（明治12年）5月に京都医学校（後の京都府立医科大学）に合併され廃止となった。」

40 「織殿」

角倉の二条屋敷のあとは、試験場となりました。

織殿（おりどの、1874(明7)年開設）と染殿（そめどの、1875(明8)年開設）京都を代表する業種であった染織業の近代化のために設けられた試験場です。織殿は河原町二条下ルの角倉邸跡地（現、日本銀行京都支店所在地）に設置され、西洋式織機を導入し、その織法の研究と技術伝習を行いました。染殿は舎密局の付属施設として設けられ、輸入染料の使用法の研究と普及を行いました。試験場の染殿とは別に、実物の染工場も河原町通蛸薬師下ルにつくられています。

41 「北海道開拓」

開拓史には次のように記述されています。「当縁郡、十勝郡の殖民地区画測定は明治29年(1896)5月から行われた。作業員の一人に京都府出身の角倉三郎がいた。道庁殖民課、永田安太郎の下で作業に従事、作業が終わると当縁郡に入植した。角倉は明治29年から昭和17年に至る46年間にわたる33冊の日記を残している。大部分が鉛筆書きであるが、中には矢立を用いたもの、赤ペンの部分もある。明治29年の日記は測定日記ともいべきもので、当縁郡の区画測定を知る貴重なものである。角倉三郎については、明治39年(1906)5月から九月にかけて北海道庁第五部殖民課が本道の移住者の経歴と成功の一斑を世に知らせ、新しい移住者の参考に記した「移住者成績調査」にも詳細に記されている。それによると、明治28年、郷里を発し、翌年に区画測量の作業員となり、当縁郡の地の利が有望であることを知り、30年に起業する。函館の柴田某の依頼ででんぷんを製造したが、失敗に終わり、31年に国有未開地二戸分の貸し付けを受け、小屋掛けし、家族を呼び、営農に当たった。39年現在、作付け反数165反、畜馬13頭、豚8頭、鶏30羽とある。」

わたしの祖父は六男だったが、三男の三郎さんの話はよく聞いている。曾祖母は付いていったものの、生活が辛いので京都へ戻り祖父と暮っていたそうだ。

4 2 「チーズ」

北海道十勝郡帯広の広尾というところに、親戚が酪農をしています。初代は角倉三郎という祖父の兄です。うちでは三郎さんと呼んでいたそうです。

いまでは酪農の父と呼ばれるほど、開拓団で苦勞され、ここまでにされました。「測量日記」を著しています。一日も欠かさず綴った日記は、北海道開拓の貴重な史料ともなっています。

大樹の名をついたチーズの味は、苦勞の味です。それを継いだのが博氏です。原生林を開いて、土地をつくり、農作業をおこない、牛馬を飼う。厳しい気候のなか、努力が花を開いたのです。日本ホルスタイン協会のHPによると次のように書いてあります。

これは東京で酪農をした角倉賀道です。「また、東京愛光舎主角倉賀道は明治36年、牝・牡各1頭のジャージーをアメリカから輸入した。明治40年には牝牝・牡20頭をアメリカから再び輸入、さらに翌41年にみたびアメリカに渡り、アウル系の優秀な純牝牝・牡6頭を購入、愛光舎におけるジャージーの繁殖を行った。」と記載されています。

4 3 「牛乳」

すべてが変わった明治維新。屋敷は国のものに、そして俸禄もなくなり、家族は恩賜金のみで食いつなぎ、それぞれに活路を見出していきました。

わたしの祖父は秀道という名前ですが、幼名は「秀六」六男です。

長男は北海道開拓へ、十勝郡へと旅立ちました。すでに夫を亡くしていた曾祖母も開拓団についていきましたが、厳しい生活が耐えられずに京都に戻り、六男家族と同居することになりました。そして他の兄弟も各地へ活路を見出していたのです。努力は報われ、長男は開拓に成功し、いまでは酪農の先駆者と尊敬されています。また賀道も殺菌牛乳を開発、近代日本に「宅配牛乳」を可能とさせ、定着普及させました。明治以降も角倉一族の社会貢献を旨とし、それぞれの道で努力を続けました。美味しいミルクを飲めば、その開発努力を思います。

その兄弟に賀道がいて、彼は明治33（1899）年、東京・愛光舎という牧場を東京・神田三崎町で経営していました。

角倉賀道が米国視察から帰国し、牛乳の蒸気殺菌を行いました。大正時代の終わり頃から、低温殺菌法の採用がみられるようになります。その先駆けのひとつ、東京の和田牛乳店では、牧場でしばった生乳をミルクプラントに運び、低温殺菌処理をしてからビン詰めして配達したと言います。

4 4 「種痘」

小児科医でもあった角倉賀道はまた、種痘をはじめました。牛痘を人体に接種して天然痘を防ぐ方法の歴史から種痘用に用いる牛の選び方などをくわしく説明し、当東京牛痘館の牛痘苗のすぐれていることを宣伝する「牛痘新論」や、「種痘全書」を著しています。

4 5 「二条屋敷」

二条城清流園（茶室）は角倉二条屋敷が解体される時移築されました。二条城のHPには、往時の二条屋敷の写真が見られます。400年もの長く住み続けた屋敷ですので見渡す景色も感慨深いものがあります。

往時の庭石もいまは二条城の庭園にあります。

二条城の椿の木も注目していただければ「白角倉」「赤角倉」とあり、角倉好みらしいです。

4 6 「嵯峨屋敷」の話

角倉家は嵯峨角倉と京角倉があり、保津川の運営管理を嵯峨角倉が、高瀬川の運営管理を京角倉がおこなっていました。京角倉は二条角倉ともいわれています。ファミリーの収益を分散し、うまく棲み分けた合理的な方法です。嵯峨角倉は屋敷が大覚寺の門前にありました。そして「花のいえ」があるあたり一帯に三千坪の屋敷がありこれは保津川の管理のための屋敷でした。長澤芦雪のふすま絵が倉庫から発見されたということです。

長沢蘆雪 江戸中期の画家。山城の人。円山応挙門下。

奇抜な構成の障壁画を描いた。大乘寺の「群猿図」、巖島神社「山姥図」など

Saga Residence

47 「花のいえ」

花のいえの歴史ブログには「花のいえの所有者の変遷（江戸時代から今日まで）が書いてあります。

「1606（慶長11）年に、角倉了以（すみのくらしらうい）が、保津川を開削して、この舟運管理のために、この地に舟番所兼邸宅を設けました。この土地は、現在約5000㎡ありますが、当時は、天龍寺の境内地であったことがわかっています。天下の豪商、角倉了以は、天龍寺の借地のうえに、邸を設けたこととなります。これは、徳川幕府の命によるものです。具体には、京都所司代の命によってここに建てられたと推測されます。その後、1607（慶長12）年には、富士川を開削。次いで天竜川も手掛けますが、これは失敗。1610（慶長15）年には、鴨川水道を作り、1611（慶長16）年には高瀬川の開削に着手し、1614（慶長19）年に完成させます。

その後、角倉了以の長男、素庵（そあん）の時代に、素庵の長男・玄紀が、高瀬川等の権利を相続します。この家系が、京角倉家として、明治まで続きます。保津川の諸権利は、素庵の二男・巖昭が、相続します。ここの家系が嵯峨角倉家として、明治まで続きます。長男が高瀬川の諸権利を相続したのは、保津川よりも高瀬川のほうが隆盛を極めていたからだと思います。

明治2年の「御一新」により、保津川の諸権利は、京都府に召し上げられることとなります。しかし、嵯峨角倉家は、明治22年まで、ここに住まわれます。嵯峨角倉家の最後の当主は、角倉玄遠（すみのくらげんえん、はるとおとも言います。）氏です。」わたしの高祖父です。

48 「ホテル・リッツカールトン京都」

49 「星のや京都」

50 「日本銀行京都支店」

51 「二条城」

52 「大井神社」

5 3 「角倉稻荷神社」

5 4 「新井白石」

ウィキペディアにはこんな逸話があります。「白石は堀田家を自ら退いて浪人し、独学で儒学を学び続けた。この間、豪商の角倉了仁から「知人の商人の娘を娶って跡を継がないか」と誘われたり、河村通頭（河村瑞賢の次男）から「当家の未亡人と結婚してくれれば3,000両と宅地を提供する」という誘いを受けたが、白石は好意に謝しつつも、「幼蛇の時の傷はたとえ数寸であっても、大蛇になるとそれは何尺にもなる」という喩えを引いて断ったという逸話がある。

5 5 「伯蒲慧稜」

5 6 「刀工」

最近、女子のあいだで刀ブームがおきているようです。会津の刀工「元興」の角家は、角倉一族で会津に出た人々があり、そこで刀を作ったといわれています。

元興は本名角大八.京都の豪商角倉家の三男に当たり.初め会津道辰に学び「道信」と称し.のち江戸に出て水心子正秀門下に入って.銘を「秀国」改めています。

師正秀は.秀国の手腕を認めて.彼自身が相州綱広より得た相州伝だけでわあき足らず.この秀国に託して.当時.相州伝では日本一と称せられていた.薩摩国の奥元平の所に自分に代わって寛政四年相州伝の秘法を学ばせに行かせています。

秀国の薩摩滞在期間は.僅か一年程でしたが.元平は彼の人柄と技りょうのよさに加え.その努力に惚れ込んで娘婿に選び.相州伝の秘法を伝授しています. 秀国 はこれを機会に「元興」と改銘し.のち会津若松に帰り.会津藩工となって.八代三善長道と共に.鍛冶棟梁の称号を藩主より賜り.文政七年三月二十八日没

会津松平家は藩祖・保科正之（徳川幕府三代将軍・家光の異母弟）が寛永20（1643）年に会津23万石に封じられたことにより始まる（「松平」姓は三代藩主・正容から）が、松軒元興の角家は宝暦年間（1751年～1763年）に京都・角倉家から会津に出たとされる。京都から会津へ出てくる経緯はわからないが、当時の角家当主は角五郎左衛門で、特に刀鍛冶と関係があったわけではないようである。初代元興（角大八）は五郎左衛門の三男として生まれた（宝暦3（1753）年頃か）。そのころの会津藩は五代藩主・容頌の時代で、五郎左衛門は藩の御台所頭として700石を賜っていた。浅学にして想像の域を出ないのだが、会津藩の家老職の石高として1000石位の家があるところから類推すると、御台所頭・700石はかなりの待遇と考えていいのではないだろうか。

初代元興・角大八は生来刀剣鍛冶に強く興味を持っていた。さらには刀工となることを目指し、最初会津において奥羽を代表する名工三善長道の系統である4代道辰について学び、刀工としての一步を踏み出した。銘を「道信」と称した。のち江戸に出、初代水心子正秀に師事し「秀国」、その後さらに薩摩に下り初代奥大和守元平について相州伝をも修得し「元興」と称する。

57 「嵯峨人形」

大日本百科を紐解くと、このように書いてあります。「嵯峨人形（さがにんぎょう）木彫りの人形に、金銀や胡粉（ごふん）絵の具を極彩色に盛り上げるように塗って仕上げた、華麗な感じの工芸的人形。一説には、江戸時代初期、貿易商角倉了以（すみのくらりょうい）が晩年京都の西郊嵯峨に隠棲（いんせい）し、この種の人形を愛好して製作を奨励したところから名づけられたという。木彫りに極彩色の様式は、仏像彫刻の仏師の技法にみられ、仏師たちが、江戸時代に入って流行期を迎えた人形の製作に移職、あるいはその余技から生まれたともいう。しかし嵯峨人形の名は、明治期に当時の趣味家が、雲母摺（きらず）りの嵯峨本や金糸などを用いて織った佐賀錦（にしき）などから連想して命名したものらしい。人形の多くは小柄で約10センチメートルから15、16センチメートル、布袋（ほてい）、大黒（だいこく）、恵比須（えびす）、唐子（からこ）（中国風の児童）などが多い。この技法は京都から江戸に伝わり、新たに丹前（たんぜん）姿、若衆、奴（やつこ）、美人など今様（いまよう）風俗物が製作された。京都製とは別な趣があったので江戸嵯峨の名が生まれた。幕末に衰退し、現在は京都、東京ともにつくられていない。〔斎藤良輔〕

58 「益壽糖」

井筒八つ橋から「益壽糖」という菓子が発売されています。食べると滋味である。これはいったん途絶えた菓子の製法を復元したものです。説明書にもあるように「元来、「益壽糖」は滋養菓子として和漢薬商により頒布されたものでしたが、明治天皇が病弱で食の細い皇太子(後の大正天皇)を案ぜられ漢方医にご命じなり、従来の「益壽糖」を改良し和漢の妙薬を加え風味と医薬効果を兼ね備えた銘菓をお作りになられたそうです。皇太子はこの「益壽糖」をとても好まれ、食欲を回復なさいまして健康を取り戻され明治天皇は大層お喜びになったそうです。」HPにはこう記載されています。「主原料のもち米の他蜂蜜、和三盆糖にニッキ、くこのみ、高麗人參、靈芝など和漢成分9種類が入っています。上品なお味に 豊潤な味わいが口の中で広がります。江戸時代から、京最高の仙菓として名を馳せた滋養菓子とのこと。白井洪庵氏ただ一人に伝えられた秘法を、井筒六代当主・津田佐兵衛が京の豪商の末裔である角倉宗家十六代・角倉平治、茶屋本家十六代・茶屋武郎と共に現代に復元いたしました」

59 「菓子」

若い頃、茶道教授もされていた上司が職場でそっと下さったのが「角倉」という干菓子です。木屋町三条の本家・月餅家が発売しています。高瀬川の敷石をデザインしたというもので上品な味でした。



60 「小説」

芥川龍之介の「奉恩記」には「ふと辻を曲がった所に、大きい角屋敷のあるのを見つけました。これは京でも名を知られた、北条屋弥三右衛門の本宅です。同じ海渡を渡世にしている、北条屋は到底角倉などと肩を並べることはできません。しかしとにかく沙室や呂宋へ、船の一二艘も出しているのですから、一かどの分限者には違いありません。」（「引用は新潮文庫」とあります。そのほか、森鷗外「高瀬舟」、川端康成「美しさと哀しみ」では二尊院の墓地で接吻する場面があります。澤田ふじ子「高瀬川女船歌」辻邦生「嵯峨野明月記」も名作です。意欲作では中田友紀子の「このもの只者にあらず」も了以の一生を書いています。宮尾登美子「松風の家」、岩井三四二「絢爛たる奔流」があります。

61 「御庭焼」

「お庭焼」「一方堂焼」と骨董品では貴重にされている焼物は嵯峨の屋敷で角倉玄寧が趣味で作陶したもので商品でなかったのです。

宮田一枝京都造形芸術大学教授は、「角倉玄寧の一方堂窯について」の最後にこのように書いています。『「角倉玄寧」の「一方堂窯」は、明治六（一八七三）年玄寧の最期をもって終焉を迎えたと言ってよいと思う。幕末・明治維新という激動の時代にあっても古稀の記念に自窯で手造りの作品を造る玄寧の姿を想像するだけでも豪商角倉家の文化的な豊かさと誇りを感じることが出来る。』

62 「絵師」

狩野派の絵師として有名なのが、吉田法眼（元陳）です。以下説明。

吉田元陳【1727～1795】

吉田元陳は鶴沢探鯨の門人。京都の豪商・角倉家の縁者で、1757年に法橋、1777年に法眼に叙任された。探索らとともに寛政度禁裏御所の障壁画制作に参加した。がほとんど重なる円山応挙も描いた主題だが、本展で紹介する群鶴図屏風は、そのいずれにもひけをとらない元陳50代以降の代表作である。

6 3 「清水寺」

歴史家の奈良本辰也氏は「清水寺の桃山風の雅な建築は、御朱印船による海外貿易で、はるか遠くのジャワやマラッカのあたりまで船を出し、外国人との接触で自覚した「日本」を意識することになる彼ら豪商の、新時代を担う気概が、桃山のおおらかで、しかも優雅な世界をつくりあげたものだ」と著書で述べており、京都を象徴する清水寺建築に、角倉など豪商たちの影響力が相当あったことを強調しています。

6 4 「曾祖父 角倉玄遠、祖父 角倉秀道」

うちの家は曾祖父さまの代(角倉玄遠)まで、嵯峨屋敷に住んでいました。大覚寺に御出仕していて、屋敷から通っていたそうです。しかしながら、明治維新は御一新ということで、嵯峨の家も、二条の家も公のものとなりました。

さて、わたしのお祖父さま(角倉秀道)はこの家で生まれました。六男坊で幼名秀六、元服して秀道となりました。嵯峨屋敷から移った住所は京都市下京区桜之町(いまの中京区桜之町)、映画館ミーナの辺で寺町通りにあったと思われれます。そこで写真館をしていたとのこと。ここから息子達は北海道に行ったりそれぞれ独立したもよう。

京都府写真師会のHPで100周年史に写真と年表がありました。1880年(明治18年)創立メンバーでした。



前列左より二人目(が母似)

「おでい(父)はんはなあ・・・」と秀道(六男)が話していたのは、お金にきれいな御仁で扇子で受け渡ししていたくらい。嵯峨屋敷を公収されて苦労されたが、時代の先端を切る写真撮影・技師として活躍した。

明治のご一新で六男であった幼名秀六は鳥取の寺に預けられて勉学(寒くて猫を抱いて寝たとの思い出話)、東京の早稲田で学んだあと、丸大洋紙店(京

都支店長となりました。洋紙が普及する時代で、それは忙しい一生でしたが、胃ガンのため50代で亡くなりました。

角倉秀道は「黄檗の由来」野崎鉄文著という本を印刷しています。本の奥付きには京都市下京区中数珠屋町東洞院東入る二人講町36番地とあります。いまの下京区役所辺りです。

これからはデモクラシーの時代だということで、「おもう(母)さま」「お得意(父)さま」という言葉使いから、「おかあ(母)はん」「おとう(父)はん」と呼び方を変え「すみのくら」から「すみくら」に変えて時代に添う決意をしておられました。写真・印刷と新しい価値観をもって大きな時代の波に乗ってこられたのです。

65 「家紋」

男は四つ目菱、女は裏桔梗だと聞かされています。男子正装は蘇芳代紋まで許されたとか。結婚式の日には、町内に紅白の幕をかけ、花嫁は綿ぼうしに打ち掛けを着て、なぎなたをついて来られたとのこと。

「お祖母さま」秀道のおもうさま(母)は、気位高く小柄で上品な女性でした。女大学から教養もすべて優れていて、「わたしの知らぬは八卦と鎖鎌だけ」と豪語されていました。このおもうさまは、三郎と帯広で暮らそうとしたのですが、厳しい気候に耐えきれず京都に戻り、秀道一家と暮らしました。

いっぽう「東のおばあちゃん」こと母方の祖母は、早くに夫を亡くし、未亡人で姉弟を育てました。夫はある子爵でしたが倫ならぬ恋をして桂川で入水したので出戻ってきたのでした。その娘が見合い結婚したのが秀道でした。

このお祖母さまは、色白でふくよかで三味線を弾いて歌うなど女っぷりがよかった祖母でした。

66 「嫁入り」

角倉が400年も営々と続いていたのは、外での仕事をする当主と家内をとりしきる妻の共同作業の結果にほかなりません。角倉に嫁した女性は、大名の娘が多かったのです。素庵は加賀藩前田利政の娘をもらいました。また玄寿は近江大溝藩主分部光命の娘、玄祐は信濃岩村田藩主内藤匡繩の娘、玄匡は武蔵国久喜藩米津通政の娘、玄寧は紀州藩家老三浦家当主三浦為脩の娘、玄恒は摂津守大田資宗の娘をもらいました。女性の力の大きさを思います

祖母が子供の頃に角倉都栄(秀道の母)から聞いた話として、お嫁入りには町内に幕を張り、綿帽子に長刀をもって嫁入りされたとのこと。お茶、お花、お針などの女性の基礎教養だけでなく女大学、武道などすべて習得してい

て、「わたしの知らないのは八卦と鎖鎌だけや」と云っていたそうです。角倉家400年を支えてきたのは、角倉へ嫁いだ女性たち。これも見直されていいと思います。

(例)

米津 通政（よねきつ みちまさ、寛延3年（1750年） - 文政2年6月13日

（1819年8月3日））は江戸時代後期の大名。武蔵国久喜藩の第5代藩主、のち出羽国長瀨藩の初代藩主。久喜藩の第4代藩主米津政崇の長男。正室は本多忠可の養女（近藤英用の娘）。子は米津政懿（長男）、娘（中山信敬の養女、**角倉玄匡の妻**）など。官位は従五位下、出羽守、播磨守。

67 「蛇体」

お祖母様は、母に毎夜のようにお話をしてくれました。面白いお話では、奥さまは入浴中は近づいてはならぬと女中に言い聞かせています。しかしある女中が耳にします。何か奇妙な音がします。シャラシャラザラザラ不思議でならないので、ついにそっと見てしまいます。すると蛇体だったそうで・・・女中は咎められて実家に帰されます。むかしはちょっとした家の子女が、行儀みならいといって女中に上ったものなのです。そのとき「決して人に言うてはならぬぞ。そのかわりこの石を取らせる。本当に困ったときに使うがいい」そして、桂川の増水で氾濫しそうな切羽つまったときに、この石を祈りとともに入れたら水が引いたとか・・・。誰かが嫉んで話を作ったのかも。そんな気がします。根拠はありませんが、代々に伝わる話です。

68 「伯父 角倉太郎」

比良山という山はないそうです。武奈ヶ岳など高い山々が連なっている山地で、琵琶湖から一望できます。その山を究めた男が角倉太郎です。「比良の父・角倉太郎」という本が出ましたが、母の兄である太郎は青年時代から地図を作り、安全な登山ができるように整えました。温厚な人柄で京都府山岳連盟の会長もながく務めたということです。弟が山スキーの怪我がもとで早世し、その仇を討つために山を究めたとも聞いています。

69 「クリスマス」

朝晩神仏に祈りながらも、心の底深くにキリスト教に惹かれます。そんな思いを『ばあどれ』という詩集にしキンドルで出版しました。

『和算の成立』の著者の鈴木武雄の論考には、山田悦郎「角倉平治氏が語る角倉家のクリスマス（昭和52年6月）」が引用されている。16代角倉平治へのインタビュー記録である、これによれば、角倉家が現代に至るまで、キリシタンの風習を継承していることを示すものであり、驚くべきことである。古活字版へのキリシタンの影響、和算へのキリシタンの影響について、いろいろと考えさせられる。

《官家角倉家（註、官家とは本家のこと）の当主の角倉平治氏と京都の全国珠算教育連盟の本部で行はれた塵劫記顯彰委員会の席でお会いした時、私は角倉氏に「角倉家はキリスト教に関係ありますか」と尋ねたところ「南蠻貿易をするにはキリスト教徒でなくては許されなかったのではないですか」といわれ、更に驚くべきことをあっさり語られた。「角倉家では昔から12月24日に特別のクリスマスをやっています。即ち床間の中央に天照皇太神の軸をかけ、これはディオスの神です。右は八幡大菩薩で、これはキリストで、左には春日大明神でマリヤをあらわしています。そしてこれらの前にクリスマスツリーを飾ります。このツリーは60cm～70cmの柳の木を10本ばかりを銅製の花器に立て、その枝に親指大にちぎったお餅を一本の枝に7ツぐらいつつつけて供えます。そして古曾部焼の高杯に黒豆を入れ供えるのです。」と云はれた。》

70 「羅窓禅師」

角倉羅窓は、平成天皇のご幼少時に侍従を務めました。禅の著述も多くあります。近代日本の行政官でもありました。非常時下、終戦時には東宮侍従でした。うちに直接関係はありませんが、一族は各地にわたっています。

清風歩々 禅道探究日録Ⅲは春秋社から発行されています。その中で乞う書いています。「感情のとりこにならずに感じ、欲するのが三昧境であり、真の自由である。」禅者の日常底の深い境涯を記す希有な記録。公案・問答・室内の実際も記され、「心が心をみる」という空の自覚の日々を明らかにする。最晩年までの20年を採録した、「日録」の最終巻。」

略歴「明治36年、広島県府中市上下町に生まれる。大正7年仏通寺丸山雪庭老師に相見。大正13年、円覚寺古川堯道老師に就く（東大法学部1年）。昭和2年、東大大学院入学。昭和3年、内務省警保局属。昭和8年、獅子窟蛮山老師に就く。昭和9年近衛貴族院副議長に随行して渡米、欧州各国出張。昭和11年、

蚕山老師遷化、法嗣正能古巖老師に就く。昭和16年、一夢蘿窓の安名を受ける。昭和20年、非常時下東宮職開設、東宮侍従兼東宮傳育官（平成天皇の養育係）。昭和30年出光興産(株)常勤参与。昭和42年、古巖老師より正燈窟の窟名を受け嗣法。昭和48年、生存者叙勲、勲二等瑞宝章。平成4年、遷化、追贈従三位。」

7.1 家の教え

祖父（秀道）は、学問が好きでした。洋紙を扱う会社の京都支店長をしていました。それで紙を粗末にすることを嫌いました。母が紙を反故にしているのをみて「お前は紙の橋を渡ることになるぞ」と戒めました。祖母もいろいろたとえ話で戒めました。「李下の冠、瓜田の沓」といって紛らわしい行いをしてはならないと云っていました。また「歌はよいよい、話はよされ、話は仕事の邪魔になる」「雉も鳴かざれば撃たれはしまい。父は長柄の人柱」といって噂話をするのを禁じました。またブローカーのような仕事を嫌っていたともきいています。

7.2 「三方五湖」

福井県の三方五湖は海水域、淡水域、汽水域を有する五つの湖でなりたつ珍しい地形である。そこには自然が保全されていて貴重な調査が行われることもあり、ラムサール条約で守られている。

しかしこの地形にいたるまで、新田開発や物資運搬のための運河開削や隧道開発の努力があった。これは角倉家がかかわっている。（後藤家もおなじく出資者であった）

レインボウラインの観光にも光を浴びてくる日が来よう。自然と人間のかかわりがナチュラルに感じられる一帯である。

7.3 「のりこさん」

二尊院は、角倉家の墓所があるお寺である。小さいころにはまだ蒸気機関車が山陰線のトンネルを出て京都へ入ってきた。汽笛の響きをかすかに覚えている。また道々には清らかな水が流れていて、沢ガニがたくさんいた。これ遊びながらお墓参りをするのが楽しかった。

墓参に行くと、従妹と一緒に石段をあがるときに気持ちは高揚していた。当時のご住職二女「のりこさん」がいらした。わたしが赤ん坊のときは、あやしてくださり、晴れ着をきて踊りを見せてくださったと聞いている。その「のり

こさん」が早世された。急なことで市内の病院までは時間がかかり、間に合わなかったという。お母様はのりこさんの晴れ着を座布団に仕立ていつも肌につけておられた。寂しい笑顔がいまでも浮かぶ。思い出はわたしのなかで消えない。

二尊院にお参りするたびに、のりこさんを思う。そのお姉様も、もちろんお母様もわたしを所縁と感じて大事にしてくださった。ありがたいことだと思う。

7 4 「龍神」

二尊院の前庭は「龍神遊行の庭」と呼ばれている。言い伝えでは、こんなお話がある。（拙作「龍女のなみだ」の別れの場面はこのイメージ）

7 5 「阿刀神社」

付録「安南幻想」

この散文詩は「安南交易と御朱印船」というリレートークで朗読するために100部限定で印刷した非売品なのですが、先日の「角倉了以とその時代」の際に大悲閣千光寺さんから100部欲しいと申出がありました。大悲閣千光寺さんと云えば、了以が亡くなった場所。保津峡を見下ろす山の中腹に建立されています。昨年に工事も完成しました。この最後に付録としておきます。

散文詩「安南幻想」

目次

ベトナム土産

海あがり

安南幻想

薫香の里

魔の白粉

天恵の薬

象の行列

孔雀献上

酔夢尽きず

ベトナム土産

大阪の詩友がベトナム旅行から戻って、わたしに藍染付の一輪挿しをくれた。淡い藍色で南国の木の葉がさらりと描かれていた。蓮茶の甘い香りが後を引いたとき、突然わたしのなかに急に「安南」という古の地名が懐かしい響きをもって立ち昇ってくるのを感じた。安南染付、それはいまでも盛んに作られている。

四百年も前に近世の京都人が、行き船には日本の善き物を積み、帰り船には彼の地に集まる善き物を積み、頻繁に交易をした地「安南」への憧れは日々に高まり、わたしは酩酊するよう夢と現の間をさまよったのだった。

海あがり

誰でも参加できるオークションに海あがりの安南染付が出品されていた。瑠璃釉一輪挿しの底には欠けがあり、貝殻がこびり付いている。その引揚品はどんな浪漫を語るのか。暴風雨で難破した船は沖に沈んでいる。柔らかい泥に覆われ海の底で眠りながら夢に耽っている。

さあ目を閉じて心の耳で聴いてみよう。

船倉の積荷は、縄で締められたままの木箱に、為せなかった務めを果たそうともがいている品々がある。

そのひとつは鹿の皮だ。それは鎧に陣羽織に使われ、本当なら合戦の先頭を切っていたはずだ。単皮の足袋に使われ櫂の木のような商人の足を守り、歩きに歩いて難所の関を越えたはずだ。このまま海の藻屑となるわけにはいかない。

次の箱は香料だ。將軍みずからが所望する極上の品も、寺院が待つ品も、何重にも包まれて納められている。それは多くの御尊像を無垢な香りで包んだはずだ。このまま海の藻屑となるわけにはいかない。

次の箱は絹の布だ。染め、刺繍、金彩と綾なす意匠を施し、活躍めざましい城主やその跡取り凜々しい衣装に、また正室や側室のあでやかな衣装になったはずだ。このまま海の藻屑となるわけにはいかない。

次の箱は蘇木だ。鮮やかな紅に染める植物。白い絹を憧れの紅色のグラデーションに染め上げたはずだ。このまま海の藻屑となるわけにはいかない。

次の箱は鉛だ。これは白い顔料になり、絵師の筆に含まれ。線となり面となり。活き活きとし素晴らしい屏風になったはずだ。このまま海の藻屑となるわけにはいかない。

柔らかな泥のなかで、彼らの夢は生活の具となり日々に愛用されること。こんな慎ましい夢が叶えられない。

そして、船乗りの魂たちは・・・針路を決める紅毛の者、屈強な乗組員たち、祈りを続けるパードレ、羽織袴の商人、一つ船に合い和している三百余名の者たちのうち、十三名が見つからない。

どの船には帰るべき港がある。待つ人がいる。たとえ破片となっても母港へ戻らねばならない。

たかが六千円ばかりで、ネットオークションで売られる沈没船の品々。引き揚げ船長の名前入りと写真入りで紹介されている。海あがりの品々は、売り物ではない。人類が結んだ異国との信頼の証、海洋交易という歴史遺産の一部なのだ。

安南幻想

十九世紀初め阮朝^{げん}が統一して越南と号して後も、再三他国の侵略を受け、北と南に分断され、苛まれても苛まれても誇り高く堪え抜き、ついに勝利し統一になった民族。いま繁栄の時来たる。

アゴタ・クリストフは小説「安南-愛の王国」のなかで十九世紀頃のヴェトナムをこのように著している。

「ジャライ族は、目に見えない精霊たちの住む世界を信じていた。神は、あらゆるもののうちに住まっているのである。どんなものの中にも、それが無生物であっても、魂が宿っている。これらのヴェトナム人たちは、賢く、穏やかだった。忍耐強く、彼らは、個々の霊が内に持つ宇宙を崇拝していた。雨が、そして月や風が、彼らに話しかける。」

安南ということばに、幻想を抱くのは、なにもわたしだけではない。時間が蕩けるように流れる平穏な彼の地は、まさしく安らかな南の国だ。

薫香の里

熱帯の濃密ないのちのやり取り、その競いがとめどなく深い森の中で収縮した。大ぶりの花は、香りのバリアを張り、隣のバリアに食込み、蝶を誘う。袋に蜜をしかけ、蟻を待つ植物、刺針を磨いて獲物を待つ葉、その長い潜み息。薫香の里はいのちの里だ。

外敵から身を守るため滲ませる自らの樹液に侵される木質の多難な一生はど
うだ。時を経て硬化し、濁の川に身を落とすした沈香は、熱を与え薫じられて
初めて妙なる香りを放つのだ。香積菩薩^{こうしゃく ぼさつ}のみ言葉のように。そして安南にとれ
る極上の沈香は TAGARA（多伽羅）、そう黒沈香は伽羅と名付けられた。

香積菩薩

彼の菩薩曰く、『我が土の如来は、文字の説無し。ただ衆香を以って、諸の天人をして、律行（戒律）に入ることを得しめたもう。菩薩は、各々香樹の下に坐し、この妙香を聞いて、すなわち一切徳蔵三昧（一切の徳を蔵せる三昧）を獲（う）。この三昧を得る者は、菩薩の有らゆる功德を、皆悉く具足す。

魔の白粉

人は薄い皮膚をもつ。太陽の紫外線には弱い皮膚だ。人類の進化のなかで、日差しの強い地帯に適応するため皮膚にはメラニンが生成蓄積され、紫外線を自然にブロックした。それは、まさに適応の勝利だ。日差しの弱い地帯には当然のこと色白の人々がいる。それを美しいと感じたことが、人々を白粉への執着となった。物心つくころから、女は白粉を顔に塗り、紅を差すことを覚える。

もし、それが毒であったとしても、なお美しくなろうとする。それは魔が誘うからだ。いったん化粧をすれば、素顔を客人（まろうど）には魅せられない。絢爛豪華な縫い取りの衣装に、高く結った髪に匹敵する化粧をする、それは極めれば極めるほど白粉を厚く重ねることとなる。もはやそこにいるのは鉛の鉍物毒を知らず美の虜となったひとりの人形であった。

天恵の薬

天龍寺船で明に渡り、医学の漢籍や薬草を求めた父の嘶を聴いて育った少年が、長じて安南へと船出したとしてもなんら不思議ではない。

古今東西において人が一番に求めるのは心身の健康、長寿長命である。そのためには、薬草を求め、薬効あるとされる物を求めた。合成化学物質でなく、それは天恵の薬だ。動物が自らを癒すために、噛んだ樹皮や草だ。

熱帯は弱肉強食、強いものが勝つ、知恵のあるものが勝つ。そんな生命力が漲っている。

木も花もそうだ。恋することすら、生命の争いだ。

花木に
敵を痺らせる
毒あり
薄め薄めて
人用い薬とす

象の行列

天竺やシャムでは神聖とされる大きな動物、優しい目をした象が初めてきたのは関ヶ原の戦いの翌年、三万七千里離れたベトナムから千二百人乗りの船で時の将軍・家康公に献上されたという。

虎、孔雀、象など熱帯の獰猛華麗な動物は島国日本にとっては珍しき極まるものであり大層喜ばれる。異国への夢の種を少年にも植え付けてしまう。それは見た人の話や絵で世間にも広まっていく。襖絵に虎が描かれ勇猛で力の象徴ともなった。

そして吉宗公の求めにより二頭の象がまた日本へやってきた。唐船の船倉には象の檻が作られ、はるばるとひと月かけて長崎港へやってきた。それぞれの象使いも一緒にやってきた。

そのうち一頭は病でなくなり、あと一頭が江戸へ旅をした。歩かねばならぬ道は、象が彼の国では神の化身、この国ではお上への献上もの故、道は小石までとりのぞかれ、水桶が置かれ、橋は普請され一日四里歩いた。

京のみやこでしばしの休養が与えられた。御所東の清浄華院には象小屋が建てられ、中御門上天皇に朝見をした。そのとき上皇より与えられた位が「広南従四位白象」。「ときしあらはひとの国なるけたものもけふこのへに見るそうれしき」と詠まれその喜びを表された。

のっしのっしと都大路を象の行列は練り歩いた。さらさらと写生する絵師のすがたもあった。やさしい目の象たちは吉宗公に喜ばれ浜御殿で飼われていたが、象の晩年は寂しかった。中野村で最期を終えたと聞く。

孔雀献上

安南の役人の家は瓦葺きで、家具調度は螺鈿細工、そして孔雀の羽根が多用されていたという。富裕の象徴ともいえる孔雀の羽根は、珍重された。徳川将軍に献上されて以来、腕の達者な絵師がその雄の羽根を写とった。筆を嘗めて尖らせ、骨描きし、それは、着物の意匠となり、上肢を合わせると孔雀紋となり、円満富裕を象徴した。実際に見た人々は孔雀のぎらりとした胸の金属光沢にまぶしさを感じ、翼を全開にした姿に魅惑された。そうして南洋への想いは止まなかったはず、まるで病のように。

玉手箱の煙

角倉船は、三百七十人乗りであった。布と網代の帆はたつぷりと風を孕み、海を渡っていった。縄に鉛の錘をつけて垂れ、四十尋より深いところには行かぬよう、慎重に陸に沿って進んでいったため、十七回のうち一度しか難破しなかった。そして、十六回の渡航で渡った何千人の人々の旅嚙は、聞く人々を酔わせた、

ひとりは、近江のひと西村太郎右衛門。二十歳で海を渡り、向こうに住まいし妻子を得て二十年後に故郷に戻ってきたときには鎖国で入国が許されなかったという。そうしても望郷の想いは遂げられることなく異国の地で果てることとなる。

不憫に思った故郷の兄弟は日牟禮八幡宮に絵馬「安南渡海船図」を奉納をし彼の魂を迎えた。

もうひとりは、播磨のひと天竺徳兵衛。角倉船で渡航、安南、シヤムに渡りヤン・ヨーステンと共に天竺まで行きガンジス河の源流まで辿り、見聞録「天竺文書」を世に出した。のちに大（鶴屋）南北が天竺徳兵衛韓漸（いこくばなし）を書下ろし、いまでも歌舞伎の人気演目だ。乙姫様のくれた玉手箱の煙は消えない。

酔夢尽きず

安南へ

天竺へ

見知らぬ国へ

四百歳の吾

酔夢未だ尽きず

そうか、もう四百年も経ったのか。安南国には恩がある。難破船から放り出された乗組衆を助けて日本国へ送り届けてくれた。是非とも子孫の口を借りて御礼を云いたい。

この国も、京都も、栄えているか。子供たちは元気に遊んでおるか。若者は夢を追っておるか。商売は盛んにやっておるか。安南はどうなっておるか。まだ船はあるか。すべて首尾良く暮らしておるか。

ああ、吾は酔って夢を見ていただけか。善きものを交易し、互いに利する、この夢だけは、これからもずっと見果てることはない。

完

この文集は、祖父母 角倉秀道・ハマの
霊前に、母ヨシの命日に供奉するものである。
2015.06.01 角倉マリ子・恵理子

すみくらまりこ (角倉マリ子)

京都府生まれ、詩人・翻訳家。国際詩誌「詩の架橋：天橋」編集主幹。日本国際詩人協会代表、日本翻訳家協会所属。「心薫る女」2008年「夢紡ぐ女」2009年「光織る女」2010年「愛装ふ女」2010年「地抱く男」2011年（以上竹林館）、「The Invisible Light」（共著）等、ストルーガ詩祭招待参加2010年、JAN SMREK 国際文学祭招待参加2011年。コモ詩祭2015年、ミハイ・エミネスク詩祭2015年、プリマ・ヴィスタ国際文学祭招待参加2019年。ナジ・ナーマン文学賞（名誉賞）2018年。ヨーロッパ科学・芸術・文学アカデミー国際詩賞2020年。翻訳賞はアイルランド文学協会より「御名を唱えて」（ガブリエル・ローゼンストック著 Uttering Her Name）、ノルウェー文学普及協会より「弾丸シュート」（オドヴェイグ・クライヴ著 Ballistic）



※本書は著者による私家版であり一般に販売して
おりません。



嵯峨屋敷（現「花のいえ」）にある角倉家の祭祀処



村田先生ご一家との会食後に記念撮影しました。